る。

以上本書の內容の概要であるが、これらからすると本書は昭和十三年度に於ける半島の考古學的調査の縮圖と言ひ得る。多方面の科學的調査を載せた此の報告書は外觀上では本文僅かに百頁、圖版また之に充たざるものではあるが、質に於いては內地の調査報告書類は勿論、美文にてつくろへる多くの古代文化史書を遙かに凌駕するものとして、永く光彩を放つであらう。評者は將來更に半島に於ける此の種考古學的調査報告書の續出を祈つて止まないものである。

〔藤岡謙二郎〕

通溝 卷下 滿洲國通化省輯安縣 高句麗壁畫墳

池內 宏・梅原末治共著

昭和十五年七月 日滿文化協會刊

昭和十年秋及ひ十一年秋の二回通溝地方の高句麗遺蹟に對してなされた調査の結果は既に池內博士により『通溝』上卷として昭和十三年十月その一半が出版されてゐた。上卷に於いて通溝遺蹟に對する全般的な考察がなされたが古墳としては石塚に重點が置かれた。壁畫古墳は殆んど土塚であるが上卷に於いては五塊墳・牟頭婁塚が石塚と併せ述べられて石塚・土塚の年代に關する意見を見たのである。即ち丸都國都時代（紀元二〇〇年頃—）は石塚が通じて行はれ土塚の多くはそれに對して長壽王の平壤遷都（紀元四二七年）以後の丸都舊都時代のもので從つて平壤遷都を大體の境として石塚から土塚へと移變したものであらうと述べられてゐた。

その土塚の中壁畫裝飾を有する舞踊塚・角抵塚・三室塚・四神塚・牟頭婁塚及び環文塚が本下卷に於いて述べられてある。先づ相並んだ舞踊塚・角抵塚は何れも石室內が一宇の屋室と見たてられて斗拱を備へた柱及び梁が描かれ被葬者を中心とした物語的な壁畫が高句麗人の風俗を具體的に示して比較的よく殘つてゐる。三室塚の壁畫として先づ注意すべきは梁狀の持送りを支へる怪異なる力士像であつてこれは多くの壁畫墳に見られる柱狀裝飾から四神塚に於けるやうな特殊な擬柱神人裝飾に移行する過渡的意匠であるとされてゐる。四神塚に於いて興味あることは持送り天井部に見られる怪異なる獸面でそれは避邪を象徵すると同時に四肢の示す所擬設の束の用をなしてゐることである。

更に牟頭婁塚・環文塚が述べられ終つて結語として通溝平壤兩地方の壁畫古墳の年代觀に及んでゐる。即ち內部構造・壁畫の手法に本づいて先づ梅山里四神塚を最も古く西曆五世紀前半に置き三室塚を五世紀後半とし牟頭婁塚は墓誌から六世紀初と推されてゐる。角抵塚・舞踊塚は安城洞大塚と相通ずるものがあり通溝四神塚・湖南里四神塚と共に大體高句麗下代の中その

中期に屬するものとされてゐる。

既に早く故關野博士により高句麗壁畫古墳の年代觀が具體的根據はあげられなかつたが大體示されてゐた。(『朝鮮美術史』)又故內藤博士は支那古鏡に本づいて年代觀を立てられたが極めて興味ある方法であつた。(『支那繪畫史』所收「高句麗古墳の壁畫に就いて」)本書の著者の一人梅原博士は最近「高句麗の墓制に就いて」(『史林』第二十四卷第一號)なる論文に於て石塚の方がより高句麗的で從つて大體論としては石塚の方が土塚より時代が遡るが必ずしも石塚營造の時期に土塚が行はれなかつたことを意味しないとされ、むしろ兩者の構造に於てかなり類似したものあることを藤田亮策教授と共に指摘されてゐる。今や『通典』上下二卷は高句麗文化の研究に對して根據ある報告を提供したがそれは既に將來の研究に對して幾多の課題を與へたことを意味してゐる。中村清兄氏によつて取上げられた星宿の問題(『考古學論叢』第四輯所收「高句麗時代の古墳について」)或ひは本書中に於いて岡田芳三郎氏によつて觀察された獸面等はさきの故內藤博士のとられた方法或ひは梅原博士の指摘された古墳構造上の點と共にその事を充分示してゐると思ふ。

尙本書は限定豪華版であるため一般への便宜がはかられてその概要が『考古學雜誌』(第三十卷第九號)に載せられてゐる。

〔澄田　正一〕

支那書籍解題　書目書志之部

長澤規矩也編著

昭和十五年十一月十五日　東京文求堂發行

四六判　三九一頁　定價貳圓八拾錢

序文によれば、著者は「漢籍の解題は、予に課せられたる責務の一と考ふるに至りたる今日、全般的の解題は漸次執筆中」であつて、その手始めとしてこの書目書誌の解題を公けにせられたとのことである。

およそ漢籍を涉漁するかぎりは、書目・書誌の厄介にならない者はないが、さういふ書目書誌がかう澤山あつては、これらを統合整理したものが當然ほしくなつてくる。今までに〃書目の書目〃として編纂せられたものとして、『書目擧要』や『書目長編』などがあるが、前者は古い出版(民國九年)であるから問題でなく、後者とても、十年も前の出版であつて、其の後に刊行せられた書目類は非常に多く、また必ずしも編者の實査によつてゐないので信用出來かねる箇所も多いことは既に認められてゐたことであつた。所が本書は、採錄せられた書目の數も少くはなく、しかもこれに書誌學界きつての權威者の手になる解題が一々つけられてあるのだから、本書の公刊によつてわれわれの今後蒙る便益は頗る多いことゝ思ふ。